



列車から見たわたらせ渓谷の景色

「わ鐵(わたらせ渓谷鐵道)と沿線地域の活性化に僕らのアイデアを」これが私たちが今学期に取り組んでいる研究テーマです。

板

わたらせ渓谷鐵道とその沿線地域を考える

—無限のアイデアから覗く地域の未来—

国際地域学部国際観光学科3年

富川 茂貴

田園の学舎 まなびや 東洋大板倉キャンパス 発

～第3部 V

いまです。

私たちの所属する古屋研究室では、主に観光を活用した地域の活性化を考え、学生自身が動き・感じ・考えることを大切にしています。研究テーマの選定後、私たちはまず現地視察を行います。そこで感じたことをもとに、個々がそれぞれの持つアイデアや考察を踏まえてプランを練り、繰り返し検討しながら完成度を高めてゆきます。これまで行った研究には、日光の景観モニタリング調査、板

倉町における観光振興などが挙げられます。また、今年のゼミ合宿の際には愛知県常滑市を訪れ、焼き物を散策道に配置しながら魅力づくりを進める産業観光への取り組み事例について学びました。

新たにできた中部国際空港や名古屋市中心部に位置する「リタケの森「産業技術記念館」などの見学を通して、産業観光への積極的な取り組みを目的の当

とから始まります。鉾石輸送は国策上重要であったことから、鉄道は1918年に国有化されました。最盛期には国内の銅産出量の4割を誇った足尾銅山でしたが、資源の枯渇により1973年に閉山、1986年には鉾石輸送が廃止されました。銅山の衰退とともに鉄道輸送量も減少を続け、1989年から第三セクター「わたらせ渓谷鐵道」となりましたが、毎年多額の赤字が続いています。

視察前のイメージでは、赤字路線だということから魅力ある観光資源が少なく、また鉄道自体の魅力度が低いのではないかと考えていました。しかし、実際に訪れると、鉄道に関しては乗務員によるガイドアナウンスや景色に合わせた列車の減速な



現在の足尾製錬所の様子

活性化へ知恵結集

観光資源生かし魅力アップ

りしました。そして、この秋からは、わたらせ渓谷鐵道とその沿線地域をテーマとして取り上げ、鉄道を含めた沿線地域のPRや誘客を考えたい、ということになりました。

「わ鐵」は、桐生市の桐生駅から栃木県日光市の間藤駅までを結ぶ第三セクターの鐵道で、その名の通り渡良瀬川上流の渓谷に沿って列車が走っています。初夏の新緑と秋の紅葉の時期にはトロッコ列車が、冬季の間は団体専用のお座敷列車が通常の車両に加え運行されています。

「わ鐵」の歴史は、足尾銅山から産出される鉾石輸送のために足尾鐵道が路線を敷設したこ



トロッコ列車内の様子

さらに、鉄道沿線には手を加えることによって生かせるよう

中心とした大学生によるさまざまな取り組みが行われており、「学生のアイデアが形になって地域の活性化に貢献できる」という事例にふれることができました。

現在、私たちは現地視察で感じたことをもとに個別のテーマを決め、研究に取り組んでいます。その一例として、童謡「うさぎとかめ」の作詞者である石原和二郎氏の童謡を生かした駅の到着アナウンスの作成、足尾銅山にちなみ銅の素材に似せた駅弁容器の作製、学生教育旅行の誘致を促進するための検討「パーク＆レールライド&バスツアー」と銘打って自家用車・鐵道・バスの三つの交通手段を利用することを提案したツアーの検討、「わ鐵」プロモーションビデオの作成などが挙げられます。これらの取り組みを学期末に取りまとめ、研究室のホームページで公開し、私たちに

また「わ鐵」沿線では「わたらせ渓谷鐵道アートプロジェクト」と銘打ち、東京芸術大学を

るのではないかと考えています。また「わ鐵」沿線では「わたらせ渓谷鐵道アートプロジェクト」と銘打ち、東京芸術大学を